

悲しみを見るときはどのようなことか

—ウィトゲンシュタインの直接知覚説の検討—

山田圭一

1. 他者の心をどうやって知るのか

われわれは日々、他人の心についてさまざまな判断を下している。彼はもう帰りたいと思っている、彼女は怒っている、彼らはびくびくしている、等々。では、私はこのような他者の心のあり方を本当に知っているといえるのだろうか。そして、もしもいえるのだとすると、どのようにしてそれを知ることができるのだろうか。これらの問いは哲学の伝統的な問題でもあったが、とりわけ後者の問いは近年さまざまな経験的な知見をもとに再び脚光を浴びつつある。本稿では、この問題を「他者認知を巡る問題」と呼んでおきたい。

この問題をめぐる論争において近年有力な立場として挙げられてきたのは、理論説 (theory-theory) とシミュレーション説 (simulation theory) である。

理論説は、われわれが他者の心的状態を知るときにいわゆる「心の理論 (theory of mind)」に基づく推論が行われていると考える。この立場は霊長類研究者のプレマックらのチンパンジーについての研究 (Premack & Woodruff, 1978) に端を発し、人間についてもいわゆる「誤信念課題」をクリアできる発達段階についての研究 (Baron-Cohen, Leslie & Frith, 1985) など、近年さまざまな経験科学的な研究成果が蓄積されている。理論説によると、観察可能な現象に科学理論を適用することで電子のような科学的な対象のあり方についてわれわれが知ることができるのと類比的に、他者の観察可能な行動に心の理論を適用することによって他者の心のあり方について知ることができることになる。

それに対してシミュレーション説は、他者の心のあり方についての認識は自分自身を想像によって他者のいる状況へと置き換えて、そこでの自分の心のあり方をシミュレーションし、それを他者に対して投影することによって成し遂げられることになる (Cf. Goldman, 2006)。理論説では、他者の心的状態についての理解が心の理論という理論的な知識を必要とするとともに、その理論からの推論という知的なプロセスを必要とするのに対して、シミュレーション説では自分自身の感情や動機をモデルとして判断することができるので、そのような過度に知的な営みを必要としないという点がメリットとして強調されることになる。近年のシミュレーション説はシミュレーションをサブパーソナルな活動として捉え、ミラーニューロンの活動など神経科学的な根拠づけが行われたりもしている (Gallese,

2005)。

このような理論説とシミュレーション説の対立は現在でも続いているが、この両者のどちらにも与しない立場として注目されているのが、「直接知覚説 (direct perception view)」と呼ばれる立場である。これは、他者の心的状態を推論の帰結や自己の投影としてではなく、知覚において直接与えられるものとして捉える立場である。この立場を代表する論者の一人がギャラガーである。⁽¹⁾彼は主にシェーラーの共感の現象学などに依拠しながら、他者の情動が志向的経験の直接の対象となると考える。そして、彼はこのような自らの直接知覚説を擁護する議論の源流としてシェーラーとともに、ウィトゲンシュタインの『心理学の哲学2』の以下の節に言及している (Gallagher, 2008, p.538)。⁽²⁾

私は彼の恐怖を——一般的に——推測しているのではなく、それを見ている。私は、外的なものから内的なものの実在の確からしさを推論しているというわけではない。
(RPP2 170)

「人は情動を見ている」——これは何と対比されているのか——人は顔のゆがみを見て、彼が喜んでいる、悲しんでいる、退屈していると推論するのではない。たとえ彼の顔の特徴に何らかの記述を与えることができない場合であっても、彼の顔を喜んでいる、悲しんでいる、退屈していると直接 (unmittelbar) 記述するのである。——悲しみは顔のなかで人格化されている、と私は言いたい。このことはわれわれが「情動」と呼ぶものの本質である。(RPP2 570)

しかしギャラガーはこれらの節がウィトゲンシュタインの直接知覚説を表していると指摘するのみで、その内実については説明していない。本稿で考えてみたいのは、これらの節で他者の情動はどういう意味で「見ている」と言われているのかである。というのも、通常心は目に見えないものの典型例と考えられており、それを「見ている」と言うのは奇妙であるように思われるからである。では、ウィトゲンシュタインはここで「見ている」という言葉をどのような意味で使っているのだろうか。

2. 見ることと推測すること

「見ている」という言葉で意味されていることを明らかにするためには、それと対比される「見ていない」ということで何を考えているのかを明らかにする必要がある。ウィト

ゲンシュタインは先の引用において「見ている」を「推測している (vermuten)」や「推論している (schließen)」と対比していた。そして現代の直接知覚説においても、知覚は推論と対比され「非推論的」という点で特徴づけられることが多く、その場合の「推論」のうちにサブパーソナルなものまで含まれるのかどうかしばしば論点となる。それでは、ウィトゲンシュタインの場合、知覚と推論はどのように対比されているのだろうか。

まず、先の引用において「私は彼の恐怖を——一般的に——推測しているのではなく、それを見ている」と「一般的に」という限定がつけられていることからわかるように、ウィトゲンシュタインは常にわれわれが他人の情動を知覚すると考えているわけではなく、推測する場合もあることを認めている。

たとえば友人と会話をしていて、どうも彼の様子がいつもと違うように感じられたとする。そこで、彼の顔をよく観察してみると、彼の表情や振る舞いに通常とは異なる要素（伏し目がちである、肩を落としている、等々）が含まれていることに気づく。そして、これらの要素と彼に最近起こったこと（たとえば、彼の飼っていたペットとの別れ）を照らし合わせて、「彼は悲しんでいる」と私は判断するに至る。この場合（以下、「ケース1」と呼ぶ）、彼の悲しみは推測されていることになる。

それに対して、彼が大粒の涙を流しながら、顔をゆがめて泣き叫んでいるときはどうだろうか。この場合（以下、「ケース2」と呼ぶ）は、確かに「人は顔のゆがみを見て、彼が悲しんでいると推論するのではない」（RPP2 570）と言いたくなる。というのも、ここではまず〈彼の顔のゆがみを見て〉、そのあと〈ゆがみをもとに彼が悲しいという判断を行う〉という二段階のプロセスが存在せず、彼の顔は最初から悲しい顔として現われているからにはかならない。

以上のような、悲しみを「推測する」と言いたくなる場合と「見ている」と言いたくなる場合の対比は、おそらく中期以降のウィトゲンシュタイン哲学における徴候と現象の区別に対応している。この対比は『哲学的考察』で以下のように述べられていた。

現象は他の何かの徴候ではなく、現象が実在である。

現象は、それがはじめて命題の真偽を決めるような何か他の徴候なのではなく、現象それ自身が命題を検証するものなのである。(PR 225)

たとえば、「音楽室に兄がいる」(A) という文が、音楽室からピアノの音が聞こえる (B) ということによって確かめられるとき、B は A の「徴候」と呼ばれ、A は B によって真偽

が確証される「仮説」と呼ばれる。^③そしてここでの仮説に対しては真偽を確かめるプロセスが存在し、仮説と徴候の関係は経験的な関係となっている。

それに対して、「私は痛い」(A')という文について同じような議論ができるだろうか。中期のウィトゲンシュタインが用いる〈検証〉概念によれば、「私は痛い」という文を検証する経験は私が痛い(B')という経験にほかならず、この場合の私の痛みは他の何かの徴候なのではなく、それこそが「私は痛い」と呼ばれるべき現象なのである。この点で命題A'と現象B'の関係は仮説と徴候のような経験的な関係ではなく、命題A'の意味を現象B'が与えるという意味論的な関係になっている。そしてそうであるがゆえに、命題A'を検証するこの現象B'は命題A'以外のものによって記述することができないのである。^④

以上の対比を他者の情動にあてはめて考えてみよう。先ほどのケース1では相手の情動はそれ自体が現れることなく徴候からの推論によって到達される仮説として位置づけられている。それに対して、ケース2では相手の情動はまさに彼の顔のうちに現われる現象にほかならず、他者の情動を「見ている」といえるのはまさにこのような場合である。

そしてこの点が、ウィトゲンシュタインの直接知覚説における「直接」の意味にも関わってくる。冒頭の『心理学の哲学2』の引用で「彼の顔を喜んでいる、悲しんでいる、退屈していると直接(unmittelbar)記述する」と述べられていたことからわかるように、彼の場合の間接・直接の区別はわれわれの言語化のプロセスの区別に対応している。

ケース1では、彼の顔がまず彼の悲しみを含意しない言葉(「伏し目がちな顔」)で記述されるがゆえに、そこから「彼は悲しんでいる」と推論すること(あるいは、推論しないこと)が可能となる。つまり、この場合の「彼は悲しんでいる」という記述は別の記述から間接的に導き出されることになる。

それに対して、ケース2では最初から目の前の事実が「彼は悲しんでいる」と記述されることになり、それ以外の記述の余地が存在してない。それゆえ、ある記述から別の記述を導く推論の余地も存在しないことになる。

そして以上の間接と直接の対比は、『哲学探究』第二部(「心理学の哲学―断片」)におけるアスペクト転換においても引き継がれている。彼はウサギアヒル図のアスペクトが転換する際に、違ったものを「見ている」のか、それとも同じものを別の仕方で「解釈している」だけなのかという問題を論じたあとで、以下のように述べる。

さて、われわれが解釈をしている場合を認識することはたやすい。もしも解釈をしているなら、われわれは偽として証明されるかもしれない仮説を立てているのである。

(PI-2 p.212/249)

ここでの「解釈」は「推測」と同様に間接的な記述に相当し、このケースにおいて私が最初に出会うものの記述は、たとえば「中央にある黒い大きな丸、丸の中央にある小さな点、丸の左側にある二本の横長の弧…」という幾何学的な記述によって与えられることになる。そしてこの記述は表象中立的であり（描かれているものがウサギである場合も、アヒルである場合も同じように成り立つものであり）、この場合「それはウサギだ」という文は偽であると証明されうる「仮説」の地位にある。このことを他者の情動にあてはめれば、解釈を行っている場合（たとえば、ケース1）では他人の悲しみは理論説がいうような「心の理論」に基いて推論されたり、解釈されたりするものとなり、仮説的な対象として位置づけられることになる。

それに対して、私にとってその絵がウサギにしか見えないとき、私に現れるものはまさに「ウサギ」として記述されるべきものであり（そしてそれ以外の記述の選択肢がないものであり）、それこそが私に直接見られている対象となる。そして他人の顔のうちに現れる情動も同様である。

他人の顔のうちにある意識。他人の顔に目を向けて、そのうちに意識を見て、ある特定の意識のトーン（*Bewusstseinton*）を見る。君はその顔のうえに、顔のうちに喜びや関心・無関心、感動や愚鈍さなどを見る。他人の顔のうちにある光。

君は彼の顔のうちに怒りを認識するために、自分自身を覗き込むのか。彼の怒りは、自分の胸の内の怒りと同じくらい明白にそこにある。(Z 220)

私は彼の顔というキャンバスのうちに彼の怒りや悲しみを見ており、それはシミュレーション説のいうように、自分の胸の内を覗き込んでシミュレーションされたものの投影でもない。もちろん、ときには相手の気持ちを想像してみることはあるだろうし、その想像の結果を相手に投影することもあるだろう。しかし、自分自身が怒りを感じているのと同じ明白さで他人の怒りが分かるとき、彼の顔には怒りが文字通り現われているのである。

以上、ウィトゲンシュタインの直接知覚説の来歴とそこから帰結する「直接」の意味を明らかにしてみた。しかし、以上の分析はあくまで「見ている」ということが「何でないのか」というネガティブな方向からの分析であり、そのポジティブな内実はまだ十分に明らかになったとはいえない。次節ではこの点をアスペクトの転換という観点からもう少

し掘り下げて考えてみたい。

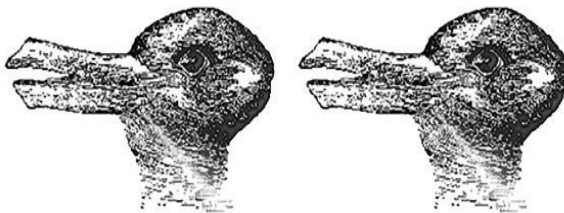
3. 他者の情動間のアスペクト転換

ウサギアヒル図と他者の情動を類比的に捉えた場合、そのアスペクトの転換の仕方は大きく分けて二つのパターンに分けることができる。

第一のパターンは、ウサギに見えていたものが、アヒルに見えるという転換であり、これは表象されている (represented) 対象間の転換である。この転換は他人の情動の場合、表出されている (expressed) 対象間の転換に対応し、喜んでいる顔が悲しんでいる顔へと転換する場合に相当する。

このような転換が、その図を取り囲む地の変化によって引き起こすことができることはよく知られている。たとえばウサギアヒル図の場合であれば、背景として書き込まれるもの (たとえば、水辺 or 人参) によってアヒルからウサギへの転換が引き起こされる (Cf. Doherty & Wimmera, 2005)。

しかし近年の研究によれば、このような背景を実際に書き込む必要はない。



たとえば、上記の画像は通常では両方がアヒルかウサギのどちらかに見えるが、マシューソンの実験は「ウサギがアヒルを食べているのを想像して」というフレーズを被験者に与えるだけで、左右の絵のそれぞれがウサギ (左の絵) とアヒル (右の絵) へと見えるようになることを明らかにした (Mathewson, 2018)。

このようなアスペクト転換と想像力の関係について、ウィトゲンシュタインは以下のよう述べている。

アスペクトの気づきは想像とも類縁的である。(LW1 733)

それを取り囲む虚構 (Erdichtung) にしたがって、様々なアスペクトのうちにそれを見ることができる。(PI-2 p.210/243)

以上の議論を踏まえると、他者の情動に関しても相手が置かれている背景をさまざまな仕方で想像することによって、アスペクトの転換を引き起こすことが可能となるように思われる。たとえば、同じように涙を流している人の表情であっても〈不合格の発表を目にした後〉という文脈を背景として見る場合と、〈合格の発表を目にした後〉という文脈を背景として見る場合とでは、その見え方は異なることになるだろう。

そしてこのような考察から明らかになるのは、他人の顔を見るという知覚は絵文字やアスキーアート ((.>ω<.>)) において「悲しい顔」を見る場合の知覚とも異なるという点である。絵文字において見られているのは、いわゆる表出的な性質 (expressive property) であり、表出そのものではない。というのも、絵文字やアスキーアート自身は悲しむことはなく、そこに悲しみは表出されていないからである。^⑤もちろん、われわれがある絵文字を〈喜びの顔〉とは異なる〈悲しみの顔〉として見るためには、単なる対象の色や形の知覚だけではなく、それらの形態的な諸性質の全体的なまとまり方の特徴（ゲシュタルト的な体制化）を見ることが必要である。しかしこれはウィトゲンシュタインの言い方を借りれば「純粋に視覚的なアスペクト」(RPP2 509) の知覚にほかならず、ここでの対象のまとまり方は「空間的なまとまり方」に留まる。

それに対してわれわれの〈情動〉概念には、時間的な広がりが含まれている。それは情動の生起にはそれに先立ってその理由となる出来事 of 生起があり、その情動の帰結としての振る舞いがあるからである。他者の顔のうちに知覚されるのは、この意味での情動の表出＝外化 (Außerung) なのであり、瞬間的な顔の状態なのではない。そこで表出されているのはわれわれの生活時間のうちで行為するものに帰属される〈悲しみ〉なのであり、悲しいという性質が帰属されるのは顔ではなく、その時間を生きる人なのである（「悲しみは顔のなかで人格化されている」(RPP2 570)。そして、他者の情動知覚は単なる視覚的なアスペクトではなく、このような情動の概念的な理解を前提とする「概念的なアスペクト」(RPP2 509) のもとで行われることになり、それはそれぞれの情動を取り囲むわれわれの生活形式を背景として成立することになる。^⑥

4. 他者の情動の脱アスペクト化

以上の転換は相手の顔のうちに見える情動が入れ替わるパターンであったが、実はアスペクトの転換にはもう一つのパターンが考えられる。それはウサギアヒル図でいえば、何が描かれているのかがわからずに線のかたまりに見えていたものをウサギとして見るとい

う転換であり、そこからさらにまた線のかたまりとして見るという転換である。これは、非表象的な対象（絵の具や線のかたまり）と表象されている対象（ウサギ）とのあいだの転換である。では、これと類比的な転換が他人の情動の場合に可能であろうか。

ここでウサギアヒル図とのアナロジーが崩れるように思われるのは、他人の顔の場合には線のかたまりに該当するような幾何学的な記述のもとでの見え方は想定しづらいからである。われわれは、相手の顔を単なる物質として見ることはできず、どうしても「人の顔」として見てしまう（たとえそれが亡骸であったとしても）。

とはいえ、彼の顔がある意味での「モノ」として見られる場面は日常的にも存在している。たとえばある人の病理的な症状を特定するために医者顔を観察する場面では、その人の眼球の動きが見られる。この場合、他者の顔は単なる物体（黒い斑点を含んだ球体）ではなくて生物の身体の一部（眼球）として見られていることになるが、それはやはり他者の情動を見るときの見方とは異なっている。

人はさらに、[他人が] 泣いているのを見る。さて、生理学的な現象を観察しているだけの人は、悲嘆の表出を見ている人とは異なった仕方その対象を見ているのであろうか。一彼はそれを異なった仕方観察しているのである。(LW1 770、括弧挿入引用者)

彼がそれを別様に見ているということの印は何か。やはり、それに対する彼の態度のとり方以外にはない。(LW1 772)

ここでは、私の見ているものの違いが、観察の仕方と態度という二つの観点から捉えなおされている。生理現象として彼の顔を観察している医者は、たとえば涙の出る量や頻度に注意を向けて見ている。しかし、自分の親しい友人の場合はそれとは異なる仕方彼の表情を見ており、彼の微妙な眼差しや仕草に注意を向けてそこで表出されている悲しみを見ている。では両者の「見る」ことの違いはどこに由来するのだろうか。

おそらくそれは、見ることの目的と関心の違いにある。医者の関心は患者の涙があふれる原因を特定することであり、そのことによって適切な治療を通じて患者の身体を正常な状態に戻そうという態度で相手に接している。そしてその関心のもとで彼の眼は治療行為の対象である「眼球」として現れることになり、そこでの知覚に基づいてその後の治療の言語ゲームが展開されていくことになる。

それに対して私は友人の彼がどのようなケアを必要とするのかに関心があり、その悲しみの種類や大きさによって私は彼にどのように声をかけ、どのくらい寄り添うのか等々の行動を変化させる必要がある。ここでの私は、ウィトゲンシュタインの言い方を借りれば、「魂に対する態度」(PI-2 p.178/22)をとっている。

そしてこのような態度で私が悲嘆にくれている人に駆け寄るとき、「私は彼の顔を悲しい顔として見ている」とはいえない。それは食事の際にフォークを目の前に見て、「私はこれをフォークとして見ている」(PI-2 p.195/122)ということが意味をなさないのと同様である。私が目の前の対象をフォークとして見ているのではなくフォークを見ているのと同様に、私は彼の顔のうちに悲しみを見ているのである。ここでは「アスペクトの『恒常的な見え』」(PI-2 p.194/118)のみが存在し、それ以外の見方の可能性は顕在化していない。(7)

そして、この点はわれわれの言語の学習においても重要な点であるように思われる。たとえば子どもが「フォーク」という語を学ぶためには、フォークかどうか判別しがたい微妙なものを指すのではなく、フォークにしか見えないものを指して「これがフォークだ」と教える必要がある。同様に、われわれが最初に「悲しい」という言葉を学ぶとき、文脈によってどちらにもとれるような微妙な表情や振る舞いではなく、典型的な悲しみが表出されている場面で「彼は悲しんでいる」と教えられることになる。第二節で確認した中期ウィトゲンシュタインにおける現象と命題の意味論的なつながりは、彼の後期の哲学においてはこのような言語ゲームに参入する際の言語教授の場面へと引き継がれることになる。

(8)

しかし、われわれの「悲しい」という語はこのような典型的な場面だけでは終わらずにわれわれの複雑な生活形式のなかでさまざまな悲しみの理由や微妙な感情の機微を含み込んだ多種多様な場面へ適用されていき、それぞれの場面に応じた情動の現れを見てとることを学んでいく。そしてそのなかでも情動言語の文法という観点から特に重要なのは、彼がウソ泣きをしている可能性や我慢している可能性を理解することである。これは情動の言語ゲームの質的な転換を意味しており、偽りと真実を区別する言語ゲームの習得を通じて、情動がときに隠されうるものとなっていく。そしてこのような偽りの可能性が具体的に顕在化した状況では、彼の顔に現れていた悲しみは消失し、ウサギアヒル図から表象される意味を剥ぎとり表象中立的な対象（キャンバス）として見るときのように、彼の顔から情動の意味を剥ぎとり、情動中立的な対象として見るができるようになる。そして私がこの地点に立つことができはじめて、他人の顔の記述と心の記述とを分離することができることになり、推測を通じて他人の心を間接的に知ることができるようになるので

ある。

おわりに

以上、ウィトゲンシュタインが示唆している直接知覚説の内実を、彼の中期の〈現象〉概念と後期の〈アスペクト〉概念のもとで捉えなおすことを試みた。ウィトゲンシュタインの考えを「説」や「主義」として括ることには抵抗がある方がいるかもしれないが、重要なのはこの考えをどのような名称で呼ぶのかではなく、その考えの哲学的射程を見極めることにある。そして私の理解する限りその射程は、日常的な他者認知の問題だけでなく哲学的な他我懷疑論にまで及んでいる。本稿ではこの点について論じる余裕がなかったが、直接知覚説が懷疑論に対するどのような応答たりうるのかという問題については、また稿を改めて論じてみたい。

註

(1) この立場を推し進めているもう一人の代表的な論者として、スミスを挙げることができる。彼は他者の心的性質をある入力に対して振る舞いを出力する機能的でディスポジショナルな性質として捉える。そして、その振る舞いが現前していなくても、その振る舞いを自分が知覚するであろう見え方を知覚的に予期しているときに、その知覚状態は他者の心的性質を「つかんでいる (latch onto)」(Smith, 2010, p.741)と考える。

このようなスミスの立場は他者の心的状態の知覚をいわゆる「高次性質 (high-level properties)」の知覚として捉える立場とみなすことができ、源河 (2017) もこの観点から独自の直接知覚説を展開している。本稿で示したウィトゲンシュタインの立場がこれらの説明とどこまで重なり、どこから異なるのかについてはまた稿を改めて論じてみたい。

(2) あるいはウーデゴーもここで挙げた節に基づいて、ウィトゲンシュタインの見解を「他人がある心的状態にあるということは、われわれが直接的な知覚的アクセスをもちうるものであり、すなわち直接見ることができるものである」(Overgaard, 2006, p.64) とまとめ、類推説批判として解釈している。

(3) おそらくこの関係はざっくりと〈徴候—確証—仮説〉のセット (対比されるほうは〈現象—検証—命題〉のセット) で理解することができる。以下の節も参照。

「感覚と件や直接経験の話をするのがもつ意義は、仮説的でない叙述を求める、ということである。もしも仮説が完全に検証されえないならば、それはおよそ検証されえないのであり、それに対しては真も偽も存在しないのである。」(PR 226)

このような〈検証〉概念がウィトゲンシュタイン哲学のうちで放棄された理由については、山田 (2009) の第二章で論じた。

(4) 周知のように、以上の徴候と現象の対比は後期ウィトゲンシュタイン哲学における徴候と規準 (Kriterium) に引き継がれていくことになる (この過程の詳細については羽地 (1996) を参照)。

(5) たとえばセントバーナード犬の顔の形は悲しい顔に見えるが、だからといって常に悲しみを抱いているわけではない。このように情動を伴わないにも関わらず「悲しい顔」として認識される際の顔がもつ性質は表出 (expression) と区別されて「表出的 (expressive) 性質」と呼ばれる。源河 (2019) では、「悲しい曲」の「悲しい」がどのような表出的性質なのかが分析されている。

(6) 純粋に視覚的なアスペクトと概念的なアスペクトの区別については、山田 (2015) で詳述したので参照されたい。

(7) このような「として見る」と「を見る」の対比に関する私自身の見解は、山田 (2021) を参照。

(8) 言語の学習において対象の見方を変化させるアスペクト転換が行われているという点については、山田 (2019) で詳しく論じた。

文献

ウィトゲンシュタインの著作と略称は以下のとおり（但し『哲学探究』の第二部の引用に関しては、第二版にも対応させるために「第二版のページ数 / 第四版の節番号」で表記した）

- PR: *Philosophical Remarks*, R. Rhees (ed.), R. Hargreaves & R. White (trs.), The University of Chicago Press, 1975.
(1987, 奥雅博訳, 『哲学的考察』〈ウィトゲンシュタイン全集2〉, 大修館書店.)
- Z: *Zettel*, G. E. M. Anscombe & G. H. Von Wright (eds.), G. E. M. Anscombe (tr.), Basil Blackwell, 1967.
(1975, 菅豊彦訳, 『断片』〈ウィトゲンシュタイン全集9〉, 大修館書店.)
- LW1: *Last Writings on the Philosophy of Psychology*, vol. I. Preliminary Studies for Part II of Philosophical Investigations, G. H. von Wright & H. Nyman (eds.), C. G. Luckhardt & M. A. E. Aue (trs.), The University of Chicago Press, 1982. (2016, 古田徹也訳, 『ラスト・ライティングス』, 講談社.)
- RPP2: *Remarks on the Philosophy of Psychology*, vol. 2, G. H. von Wright & H. Nyman (eds.), C. G. Luckhardt & M. A. E. Aue (trs.), Basil Blackwell, 1980. (1988, 野家啓一訳, 『心理学の哲学——2』〈ウィトゲンシュタイン全集補巻2〉, 大修館書店.)
- PI-2: *Philosophical Investigations*, Part II (Philosophy of Psychology — A Fragment [previously known as ‘Part II’]), revised 4th ed., P. M. S. Hacker & J. Schulte (eds.), G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker & J. Schulte (trs.), Wiley-Blackwell, 2009. (1976, 藤本隆志, 『哲学探究』第二部〈ウィトゲンシュタイン全集8〉, 大修館書店.)

*

- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., & Frith, U. (1985), "Does the autistic child have a "theory of mind"?", *Cognition*, 21, pp.37-46.
- Doherty, M. J. and Wimmera, M. C. (2005), "Children's understanding of ambiguous figures: Which cognitive developments are necessary to experience reversal?", *Cognitive Development*, 20, pp.407-421.
- Gallagher, S. (2008), "Direct perception in the intersubjective context", *Consciousness and Cognition*, 17(2), 535-543.
- Gallese, V. L. (2005) "'Being Like Me': Self-Other Identity, Mirror Neurons and Empathy," in: S. Hurley & N. Chater (eds.), *Perspectives on Imitation*, MIT Press.
- 源河亨 (2017), 『知覚と判断の境界線: 「知覚の哲学」基本と応用』、慶應大学出版会。
- (2019), 『悲しい曲の何が悲しいのか: 音楽美学と心の哲学』、慶應大学出版会。
- Goldman, A. I. (2006), *Simulating Minds*, Oxford University Press.
- 羽地亮 (1996), 「ウィトゲンシュタインにおける基準概念の形成過程—「文法と事実の区別」に寄せて—」, 『哲学論叢』、23 号、62-74 頁。
- Mathewson, K.E. (2018), "Duck Eats Rabbit: Exactly Which Type of Relational Phrase Can Disambiguate the Perception of Identical Side by Side Ambiguous Figures?", *Perception*, 47(4), 466-469.
- Overgaard, S. (2006), "The problem of other minds: Wittgenstein's phenomenological perspective", *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, 5, 53-73.
- Premack, D. G., Woodruff, G. (1978). "Does the chimpanzee have a theory of mind?", *Behavioral and Brain Sciences*, 1(4), 515-526.
- Smith, J. (2010), "Seeing Other People", *Philosophy and Phenomenological Research*, 81(3), 731-748.
- 山田圭一 (2009), 『ウィトゲンシュタイン最後の思考—確実性と偶然性の邂逅』、勁草書房。
- (2015), 「アスペクト転換において変化するもの—ウィトゲンシュタインの二つのアスペクトの分析を通じて」、小熊正久・清塚邦彦(編著)『画像と知覚の哲学』、東信堂、205-223 頁。
- (2019), 「言葉の学習におけるアスペクト知覚の役割—ウィトゲンシュタインの直示的教示の考察を通じて—」, 『人文科学研究』、49 号、51-69 頁。
- (2021), 「見ることの日常性と非日常性」, 『現代思想 総特集=ウィトゲンシュタイン (2022 年 1 月臨時増刊号)』、第 49 卷 16 号、青土社、186-198 頁。

〔千葉大学・哲学〕